

川というグリーンインフラとどう向き合うか？

代表理事 塚原 浩一

グリーンインフラをどう考えるか？

国土交通省によれば、「自然環境が有する多様な機能をインフラ整備等に活用することで様々な地域課題の解決を図る取り組み」とのこと。

さらに、自分なりに勝手に解釈すると、『自然環境や生態系そのものこそが地域社会を成り立たせる基盤であるという認識のもとで、その自然環境の特性・機能を尊重し活かして持続的な地域社会をつくる、その基盤となるべき自然環境を指してグリーンインフラ』ということかなと思う。

そう考えると、川と川を中心とした流域の自然環境は基本中の基本のグリーンインフラ。地域社会は、水害のリスクを受け止めつつ、水や生態系がもたらす恵みを受容し、川が中核となって形づく自然環境・自然景観のなかで暮らしを営み、そうしたことが相まって川を中心とした伝統文化を育んできた。

川の怖いところも優しいところもすべて受け入れて、その価値と機能をなるべく大きく活用し、そのリスクをなるべく小さくしようとするのが地域社会のあり方として大切なのかなと思う。かつてはそのような地域社会の営みの均衡点が、もっと自然環境に近い、今の言葉でいうとネイチャー・ポジティブなところにあったはずだが、今はそれがかなり自然環境と反対方向に振れてしまっている。そういうグリーンインフラとしての川のあり方、川との向き合い方を再認識し見直す必要があるのではないかと。治水利水とあわせて自然環境の保全・再生を図る、これまでも目指してきたことではあるが、温暖化が急速に進むなかで治水が優先課題と見なされるのはやむを得ない面があるのかもしれない。しかしながら、自然環境が地域社会のおおもとの存立基盤（＝インフラ）であると考えたグリーンインフラの視点からは、もっと根源的に治水・利水・環境の効用とリスクを総合的に捉えたソリューションとしての川と流域のあり方を描きなおすべきだと思う。

そういったパラダイムシフトのためには、流域治水が大きな役割を果たしてくれるのではないかと期待する。

これまでの河川管理は、治水を中心に河道掘削、

堤防、護岸、洪水調節施設など、治水の装置としての機能に頼ってきた面が否めない。一方で温暖化の影響が顕在化し、いまや自然現象には際限がなく従来型の施設対応では克服しきれない、あるいは追いつかないことが明らかになりつつある。これまでも環境に配慮した川づくりを工夫しつつなんとか治水と環境のトレードオフに折り合おうとしてきてはいるが、今後さらに大規模に治水対策を進めなければならない一方で、自然環境の劣化が経済の成長、持続的な社会の維持の足かせになりかねないとの認識が進んだいま、治水も自然環境の劣化とのトレードオフ関係を克服していかないと際限のない気象の激化に対応できないのではないかと。極端に言えば、環境を犠牲にして治水の安全だけ高めても、やりすぎれば地域社会の存立が自然環境基盤の面から脅かされ元も子もなくなってしまいかねない。今やそういう瀬戸際に来ているのではないかと。これから温暖化に対応してさらに治水のレベルを上げていかなければならないのであれば、従来型の構造物に頼った手法だけではなく、自然環境の営力を治水にどう活かす、自然からの恵みをどう享受していくのか、安全と利便性や経済と環境を合わせたグリーンインフラ的なアプローチとソリューションが求められると思う。

すべての人と地域社会に治水にコミットしてもらおうのが流域治水なのであれば、すなわちこうした川というグリーンインフラへの向き合い方にコミットしてもらおうということだと思う。

グリーンインフラとしての多面的な川と流域の価値・機能を理解し、水害のリスクも理解したうえで、多様な手法で多層的・多面的に取り組んでもらうことではじめて真の流域治水が実現する。それによって川と流域の機能と価値も高まり地域の存立基盤が強まっていく、そういう治水と環境が響きあっていき、そのことが地域の成長・活性化のエンジンになる社会をデザインしていくことが必要だと思う。

住民目線では、単に「治水に協力してください」「下流を助けるためにお願いします」ではなくて、むしろそうしたグリーンインフラ的アプローチこそが流域治水を進めるうえでも大きなモチベー

ションとなるのではないか。

川とどう向き合い、自然環境の価値を保全し活かしていくのか、それが治水とどうつながっていくのか、多様な取り組みを小さなものでも大切にしていけることが重要だと思う。例えば、河川景観を保全し自然を再生する取り組み、放棄地などを湿地や農地や花畑として再生する取り組み、かわまちに賑わいを取り戻す取り組み、そうしたことが川と流域の環境を豊かにして保水力・遊水力・浸透力を少しずつでも高め、土砂や流木の流出を抑え、人々の関心を川と流域に向かわせ、川をよく知る人材を育成するなど、多層的に地域の防災力を高めることにつながる、そういうアプローチが大事ではないか。

そうした時に鍵になるのはグリーンインフラの多面的な価値をどう評価し意識して行動するかということだと思う。水と川にかかわる活動・取り組みが治水と環境にとってどういう影響力・効果・インパクトを持つのか、そこの見える化が必要になる。行政目線では治水対策としては効率が悪い、効果が薄いなどと軽視されがちかもしれない取り組みを大切にしリスペクトして、地域社会のあらゆる営みを緩やかでも良いので治水・環境両方に結びつけていく、そういうことがグリーンインフラに向き合う精神ではないか。

治水は、構造的な手法の方が効率がよく評価がしやすかったからそうしてきたが、一方で環境についてはキチンと評価できていなかった反省がある。グリーンインフラとして多面的に評価するには、一元的な数値的評価などに固執するのではなく、社会的なコンセンサスがどこにあるのかしっかり探っていくことが重要だと思う。

グリーンインフラとしては、治水機能の面でも流域を見渡したなかでの細やかで多様な評価が必要になる。従来の治水計画のように下流の基準点の水位をどれだけ下げると、流量をどれだけ減らせるかはもちろん重要だが、流域の隅々における様々なグリーンインフラの取り組みを評価するためには、もっと流域思考で視点を広げ、柔軟に大らかに評価していくことも必要なのではないか。川や湿地の自然再生、水循環の保全、農林業の再生、かわまちづくり、そうしたことに取り組む多くの人たちが、自分たちの活動が流域治水にも貢献できる、あるいは活動を通じて流域治水に貢献したいと思っている。そうした想いを後押しすることが大きなムーブメントをつくり、結果として地域の防災力を高める推進力にもなっていくと思う。

そうやって取り組みを応援していくことで治水と環境がWIN-WINとなる地域づくりを進めて行きたい。グリーンインフラとしての川は、様々な環境面、利水面の恵みを楽しみながら治水面のリスクをどう受け止めるのか、そのためのマネジメントが重要と思う。現代社会では、環境に寄りすぎても治水に寄りすぎても成り立たない。結局は多様な価値観のなかでどこへ向かうか社会の意識とコンセンサスが大事になる。

いずれにしても究極の目標は良い地域づくり、持続的な社会づくりであり、安全で環境がよくて、そのことが経済を回すエンジンになる、そうした地域社会を実現していきたい。そのための調和のとれたグリーンインフラとしての川と流域の取り組みを進めたい。